



## 分析を通じて、ともに最適解を探す

株式会社リガクの松田渉と申します。バトンをいただいたジューエルサイエンス株式会社の齋藤凜太郎さんとは、大学の研究室で7学年違いでした。彼が研究室に入ってきた頃には私はすでに社会人で、当時は人懐っこい「研究室の後輩」という存在でした。その彼と数年後、別々の会社で共同研究をすることになるとは思ってもいませんでした。この続きは最後に触れることとして、まずは私自身と「分析」の歩みを振り返ってみたいと思います。

私は放射化学を専門とする研究室で、環境中の放射性核種の分析をテーマとした研究に携わり、その中で固相抽出法やICP発光、蛍光X線分析(XRF)なども経験しました。分析の面白さを実感したのは、自分で立てた仮説が実験で裏付けられた瞬間でした。試行錯誤の末に得られた結果の達成感は、今でも鮮明に覚えています。初めての研究発表は、2013年の分析化学討論会(函館)でした。緊張しながら臨んだポスター発表では、想定外の質問や助言をいただき、自分の研究をさまざまな視点から見直す貴重な機会となりました。コアタイムを終えた後、研究室のメンバーと食べたラッキーピエロのチャイニーズチキンバーガーは、頑張った一日のご褒美として今でも忘れられない味です(笑)。

修士課程の最後には、水中の $^{90}\text{Sr}$ の放射性核種の半減期を求めるため、毎日決まった時間に測定を続けました。雪の日も研究室へ通い、「もし仮説どおりの結果にならなかったら、どう考察しよう」と不安を抱えながらデータを積み重ねました。最終的に期待どおりの結果が得られたときは、それまで積み重ねてきた試行錯誤が一本の線につながったような感動がありました。こうした経験を通して、分析の面白さだけでなく、分析に携わる人たちを支える仕事に就きたいと思うようになり、現在のリガクへ入社しました。

リガクへ入社後は、XRFのアプリケーションサイエンティストとして、お客様からの依頼分析業務をはじめとして、日々のお困りごとを解決するための提案などにも携わってきました。その中で分析とは、データを測るだけでなく、課題に応じた最適解を考えることでもあると感じました。私にとってXRFは、「モノボケ」のような分析法です。試料という「お題」は毎回違い、正解も一つではありません。その答えを導くためには、前処理

の工夫が欠かせません。試料に応じた前処理を検討し、「どこまでの精度が必要なのか」を考えながら、目的に応じた最適解を探していきます。その過程では、「この条件が結果に効いているのではないか」と仮説を立て、一つずつ条件を切り分けながら検証を繰り返します。学生時代は、仮説を検証することが分析の面白さでしたが、この仕事ではお客様ごとに異なる課題に対して最適解を考えることが、新たな面白さになってきました。分析の対象は変わっても、試行錯誤しながら最適解を探す姿勢は学生時代から変わっていません。

現在はプロダクトマーケティングに携わっています。ここでもお客様の声から仮説を立て、製品開発につながっています。そうした仕事の中で再び一緒にすることになったのが、冒頭でご紹介した齋藤さんでした。学生時代は研究室の後輩だった彼と共同研究を進め、2025年の分析化学討論会(松山)では、同じポスターの前に並んで議論することになりました。学生当時は想像もなかった光景でした。分析という共通言語があったからこそ、立場が変わっても再び一緒に研究できたのだと感じています。

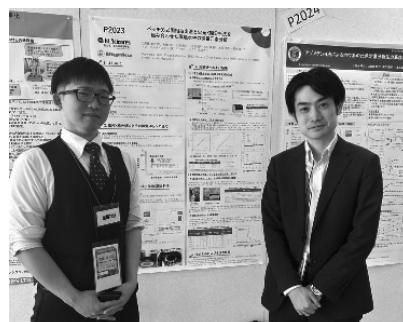


写真 共同発表する齋藤さん(左)と筆者

さて、次のバトンは、Yoshikawa Sci. Lab. の吉川裕泰さんをお願いしたいと思います。学生時代、実験のTAとして大変お世話になりましたが、先生は学生にもTAにも分け隔てなく接してくださる方でした。社会人となった今でも学会でお会いすると、一緒にお酒を飲みながら分析談義に花を咲かせています。分析を通じていただいたご縁が、学生時代から今も続いていることを嬉しく感じています。それでは吉川さん、次のバトンをよろしく願いいたします。

〔株式会社リガク 松田 渉〕